

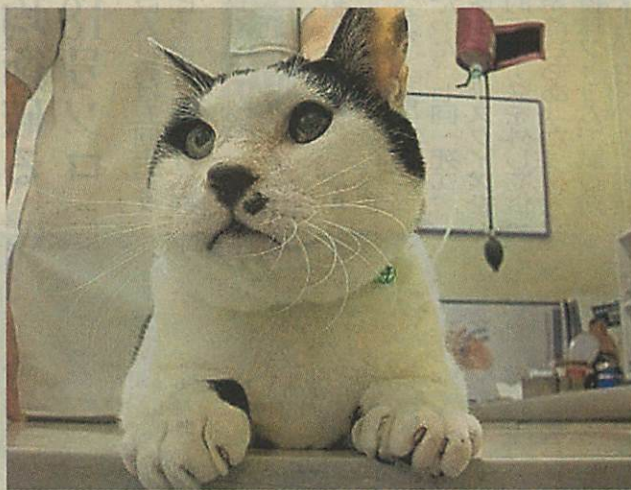
動物の診察室から

○ 5 ○

十九歳の日本猫「シロちゃん」は、もう三年前も毎日病院に通っていましたが、三年前に具合が悪くなり受診した時に、血液検査の結果、慢性の腎炎と肝機能異常と診断されました。当時の年齢が十六歳とかなりの高齢で、予後もあまり良くないと

定期的な血液検査では、腎臓、肝臓の値は良くなっています。でもシロちゃんは元気で毎日注射に通っています。

シロちゃんの飼い主とシロちゃんを愛しています。たくさん愛情を受けた動物は、病気になる



いい子で治療を受けるシロちゃん

僕ガムバルにゃん!

飼い主の愛で生きる力

思われました。その後、点滴などの治療を受けていましたが肝炎が悪化。治療のためのステロイドにより糖尿病を発症するなど、幾度も生命の危機を迎えました。でも三年たった現在は、毎日の皮下補液とサプリメントの投与で、抜け落ちていたお顔のヒゲも、ぴんぴんとなり、体重も一時より回復し、待合室で待っている間も大きな声でニャ〜と聞いています。

「がんばろう!」と思った時に、動物の診察をしていると思っようです。と、不思議なことがあると、不思議なことがあると、と感じることがあります。とても重症で、いつ死を迎えてもおかしくなかった犬のミルクちゃんは、海外赴任のお母さんが連絡を受け帰ってくる三日間をがんばって、お

母さんが帰ってきたその日の夜に息を引き取りました。ある日の夕方、診察に来たワンちゃんは、高齢で重度の肺炎のため、酸素をかかせていないと生命の危険がありました。酸素をかかせていても、80%以上の確率で朝まで

そうと、悩みました。結局その夜は病院の酸素室で治療を受けることになりました。今思うと、その子は、私たちの会話を聞いていたのだと思います。翌朝、呼吸は楽になり酸素室から出ることができ、大好きな食パンを半分食べたのです。その時は、回復

吸が楽になれば家に帰れると思うってがんばったからだと。飼い主さんとおうちに帰り、その夜中に、みんなに見守られ息を引き取りました。シロちゃんも、飼い主さんの愛情を受け「僕、ガンバルにゃん!」と今日も診察台でいい子で治療を受けています。

た。飼い主さんは、助からないのなら家に連れて帰りたい、でも、酸素を切って苦しむのはかわいそうと、悩みました。結私たちの会話を聞いていたのだと思います。翌朝、呼吸は楽になり酸素室から出ることができ、大好きな食パンを半分食べたのです。その時は、回復してきただと思いましたが、翌日は食欲はなく、面会にきた飼い主さんを帰りにじーっと見ていました。その時は、やっと気がつきました。「そうか、この子は家に帰りたいんだ」と、この子が少し回復したのは、病気が治ってきたのではなく、呼吸が楽になれば家に帰れると思うってがんばったからだと。飼い主さんとおうちに帰り、その夜中に、みんなに見守られ息を引き取りました。

